

[巻頭随想]

「日本ブドウ・ワイン学会誌」発刊の頃

米虫節夫

大学院時代の研究テーマをそのまま引きずり、微生物を殺すことばかり研究していたが、1983年に近畿大学農学部に移ったのを契機に、微生物の有効利用を考えることになった。与えられたテーマの中に、ワインに関するものがあり、飲んべえでもあったので、早速ワインの分析やワイン酵母の研究を始めた。確たる成果は出なかったが、本学会には1985年の年度大会に初めて参加した。後で知ったことであるが、本学会はその前年1984年11月に設立総会をおこなっており、研究発表を中心とする年度大会としては1985年が初めての大会であった。以後、ほぼ毎年、年度大会には参加させてもらっている。

1987年になり、横塚弘毅先生の推薦で「NEWSLETTER 編集委員会」の委員になるが、この業界について何も知らないで、雑用のお手伝いもできなかった名前だけの委員である。ところが、1989年7月の理事会で、そろそろ「学会誌」を出そうではないかとの話がでて、大塚謙一先生を編集委員長、僕が副編集委員長ということになった。

編集委員長・大塚先生の指示の下、創刊号の準備に取りかかった。「虎の威を借る狐」よろしく、すべて「大塚先生が、貴方に〇〇に関する原稿を書いてもらうようにということです」という調子の原稿依頼で、なんとか1990年1月に「ASEV JAPAN REPORTS」創刊号の発刊にこぎつけた。この号は、週刊誌的な装丁だったため、数人の理事から「学会誌だから、背表紙薄くても背表紙をつけることになった。はじめは原著をつけて欲しい」というクレーム付き、第2号からは論文のない名ばかりの学会誌だったが、多くの人に良い学会誌ができたといって喜んでいただき、大塚先生からは「編集委員会をしよう」といって、飲み屋に連れてもらい、ワインに関する蘊蓄を色々と聞かせていただいた。

原著論文の掲載は、アメリカ親学会との関係で色々議論されたが、Vol. 2, No. 1 から掲載されだした。また、Vol. 2 からは、No. 1 と No. 2 が通常号で、No. 3 が大会特集号というパターンも定着した。それにつれ編集委員会も陣容が増し、年度大会の前日に編集委員会をおこなうようになった。論文審査委員ができたのは、Vol. 6 からである。さらに、Vol. 7 からは判型が B5 版から A4 版になり、表紙デザインも大きく変わった。1994年から4年間は編集委員長として学会誌の編集に携わり、1997年岡本五郎先生にバトンタッチした。

この原稿を書くにあたり、古い資料を取り出し、往時を思い出し楽しい経験をさせてもらったと感謝している。関係者の皆様にありがとうございましたと感謝の意を表したい。さらに、今回、近畿大学農学部の定年を前にして、年度大会の大会委員長を一度はしておくようにという御配慮で、本年11月25日に近畿大学農学部・奈良キャンパスで本年度の年度大会を実施させてもらうことになった。詳細は別途公表されるが、多くの人の参加をお待ちしている。